

令和5年度第1回南九州市総合教育会議 議事録

1 日時

令和5年9月28日 午後13時30分～

2 場所

知覧庁舎 本館2階 委員会室

3 出席者

(1) 南九州市総合教育会議構成員

市長（議長）	塗木 弘幸
教育長	有馬 勉
教育委員	海江田 宗順
教育委員	池畠 薫
教育委員	大迫 雅彦
教育委員	末原 貴子

(2) 南九州市教育委員会事務局

教育総務課長	有水 志郎
学校教育課長	竹下 公博
教育総務課総務係長	東垂水 克典
学校教育課学校教育係長	永田 大作
学校教育課学務係長	星原 貴光
学校教育課学校教育係指導主事	山口 幸作
学校教育課学校教育係指導主事	増山 聡

(3) 南九州市総合教育会議事務局

総務課長	東 成功
総務課行政係長	有蘭 琢也
総務課行政係	白澤 遼

4 会次第

- (1) 開会
- (2) 市長あいさつ
- (3) 協議

ア 小・中学校の学力及び体力の向上施策について

イ その他

- (4) その他
- (5) 閉会

5 会議録

東成功総務課長)

みなさん、お疲れ様です。それでは、ただいまから令和5年度第1回南九州市総合教育会議を開催いたします。開会に当たりまして、市長の挨拶をいただきます。

塗木弘幸市長)

教育委員の皆様におかれましては、本年度第1回目となります南九州市総合教育会議に御出席いただきありがとうございます。また、日頃より本市教育行政の執行に多大な御尽力を賜り、この場を借りて厚く感謝申し上げます。御承知のとおりこの会議は、教育大綱の策定に関するもののほか、教育を行うための諸条件の整備、児童・生徒等の生命又は身体への被害に対する緊急措置に関する事項について協議・調整を行うものでございます。本日は最近の教育を取り巻く現状として、本市における小・中学校の学力及び体力向上に関する施策について協議する予定としております。それでは、限られた時間ではございますが、この会議設置の趣旨にのっとり、教育に関する自由な意見交換の場として、皆様の忌憚のない御意見を賜りますようお願いを申し上げまして、開会にあたっての御挨拶いたします。

それでは、本日はどうぞよろしくお願いいたします。

東成功総務課長)

それでは、会次第の3番目協議の方に入らせていただきます。協議に入る前に本日の会議の進め方について御説明をいたします。まず、関係者及び担当課のから資料に基づきまして、協議内容に関する現在の状況について説明を行います。次に説明に対して質疑を受け、関係者等から回答を行います。最後に、各委員への意見を求めますので、皆様方の知りうる範囲で結構ですので御意見や情報等をお聞かせいただき、教育委員会と市との有意義な情報交換を行うことができればと考えております。それでは、本会議設置要綱第4条第1項の規定によりまして、市長が議長となります。この後協議の振興をお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

塗木弘幸市長)

それでは、協議に入ります前に、南九州市総合教育会議設置要綱第6条第3項によりまして、本日の議事録の署名人に、大迫雅彦教育委員を指名いたします。

早速、協議に入ります。協議事項の1番目、「小・中学校の学力及び体力の向上施策について」学校教育課から説明をお願いします。

竹下公博学校教育課長)

学校教育課です。これから、南九州市小中学校の学力及び体力向上に対するこれまでの取組とその結果、今後の取組について述べさせていただきます。この後は座って述べさせていただきます。では、スクリーンを御覧ください。

(モニター画面にパワーポイントを表示)

まず、学力です。我が国の学校教育における学力は、学習指導要領に明確に示されております。現在私たちが高めようとしている学力は、知識、技能、思考力、判断力、表現力、そして学びに向かう力です。これらの学力をバランスよく身につけさせることによって、教育の究極の目標である人格の完成とよりよい社会人としての資質の育成を目指しております。この学力は恒久的なものではなく、時代の変化や要請とともにおよそ10年の周期で見直されており、この学びに向かう力は、従前は学習に対する関心や意欲、学ぶ態度とされておりました。この学力を子供たちがどの程度身につけているのか。これまでは、各学校に業者の作成した標準学力検査を実施し、各学校で分析を行い、指導の改善に生かしておりました。しかし、OECD経済開発協力機構が平成12年から始めた世界的な学力調査の結果が公表されるようになり、我が国の学力低下が大きな問題として取り上げられるようになりました。

これらを契機として、学力に係る説明責任を求める声も大きくなり、国、地方公共団体、各学校それぞれにPDCAサイクルに沿った取組が求められるようになってきました。

そこで、文部科学省は平成19年から全国一斉に全国学力・学習状況調査を始めます。その目的は、学力と学習状況を調査することにより、教育施策の改善を図ることであり、この後、それぞれの担当から、この分析結果とそれに基づく対策を述べさせていただきます。

永田大作学校教育係長)

それでは、学力調査の結果説明の前に、まず、これまで学校教育課として取り組んできた学力向上の施策等を説明します。

まずは、年8回行っている管理職研修会です。この研修会では、本市の学力の課題や基本的な事業の在り方、効果的な家庭学習等、市の学力向上のための施策を説明する場となっています。全ての学校で取り組むべき内容を全校長教頭と共通理解を行い、各学校で具体的に実践しながら学力向上につなげています。

次に、学校訪問です。市教育委員会学校訪問と南薩教育事務所との合同訪問を合わせて年10回程度行っています。各学校が自校の成果と課題を細かく分析し、市教委が説明を聞き、授業の様子を参観した後に学力向上対策は適切であるか、授業で実践されているか、改善すべき点はどこなのかを見極めながら様々な視点から具体的な指導を行います。各学校では、それらの指導をもとに学校全体で授業改善などを行っていきます。

次に、学力向上で一番重要となってくる個々の教員の授業力を高めるための指導力向上研修会の実施です。市教育委員会主催の研修会や南薩教育事務所、県総合教育センター等が行う研修会に各学校の先生方を参加させています。研修会では、最新の情報等を提供し、今日的課題の解決や教育方法の改善を図るために様々な内容を学べるようになっていきます。

次は、効果的な指導方法の研究を行う研究協力校です。昨年度は中福良小学校と青戸小学校2校が研究公開を行いました。中福良小学校では、国語の授業において読書活動を効果的に位置づけた授業づくりを提案し、読解力の育成に力を入れました。また、青戸小学校では、1人1台タブレットを使用して自分のペースで学習を進めるためのコンテンツを作成し、それらを効果的に使った授業づくりを提案し、情報活用能力の育成に力を入れました。

このような学力向上対策を実施してきた成果として、一つ目は、子供たちに分かるまで教えようと一生懸命に取り組む教員が増えてきました。全国学力・学習状況調査の質問紙で先生は、授業やテストで間違えたところや理解していないところについて分かるまで教えてくれると思いますか、という質問に、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と答えた小学校6年生が96.8パーセント、中学校3年生は93.2パーセントと、どちらも全国・県を上回っています。今後は、今の学習指導要領に示された授業改善をさらに進めていく必要があります。

二つ目は、1人1台タブレットを活用した指導方法の改善が進んできたということです。このことについては、学校差・教員差をいかになくしていくかが課題となっています。

それでは、次に数値で表される学力を全国学力・学習状況調査の結果で見たいと思います。過去5年間ですが、令和2年度は中止になったため実質4年分の結果となります。棒グラフの左側の青色が南九州市、真ん中のオレンジ色が鹿児島県、右側の灰色が全国の結果を示しています。

まず、小学校6年国語です。平成31年と令和3年は全国とほぼ変わらない結果となり、令和4年度は全国県よりも上回る結果となりました。本年度の結果については、グラフのとおりですが、分析については全教科とも後ほど説明いたします。

小学校6年の算数です。平成31年は、全国・県に比べて少し差がありましたが、

令和3年、4年はほぼ同等の結果となりました。

中学校3年の国語です。平成31年は、全国と比べて差がありましたが、令和3年、4年は全国・県とほぼ変わらない結果となっています。

中学校3年の数学です。平成31年は、全国・県と比べて差がありましたが、令和3年はほぼ同等の結果、しかしながら、令和4年は差がある結果となりました。算数数学については、課題の残る結果となっています。

中学校3年英語は、平成31年と本年度実施されましたが、全国・県と比べて差のある結果となりました。

小学校6年、中学校3年の理科は、昨年度実施されましたが、こちらは両学年とも全国・県と比べてほぼ同等の結果となっています。

このように、全国学力学習状況調査の数値での結果からは、教科やその年によって多少の差が見られますが、この僅かな差から課題を見つけて改善していくことにより南九州市の子供たちの可能性を広げていきたいと考えています。

それでは、本年度の結果について説明します。本年度の県との比較を分析しますと通過率はマイナス1からマイナス7となっています。これらを問題数で表しますと、0.2とか0.4問の差で差が見られる教科は1問と少しとなっております。そこで、私たちはあと1問の正解を目指して、という目標を定めて各学校における授業改善への指導助言に取り組んでいこうと考えました。あと1問とは、どういう問題になるのか、各教科の分析をこの後説明します。

星原貴光学務係長)

それでは、本年度4月に実施されました全国学力・学習状況調査の小学校6年国語科の概要について御説明いたします。実施時期は4月、ページ数は20枚、回答時間は45分、問題数は14問あり、そのうち基本問題が7問、応用問題が7問となっております。

基本問題を御覧ください。このようないわゆる漢字の読み書きについては、通過率も高く、県・全国と比較しても差のない結果となっています。

続いて、応用問題です。これまでの国語のテストでは、いわゆる文章を読んで自分の考えを100字程度にまとめる、このような問題が中心でしたが、最近では文章に合わせてグラフも読み取りさらに条件に沿って自分の考えをまとめなければ正解とはなりません。この問題の通過率は全国的にも低く、25.1パーセントとなっています。南九州市の子供たちは、こういった問題をあと1問解くことで学力が身につくと考えております。

増山聡指導主事)

次に、算数です。問題の概要につきましては、ページ数が26ページあり、回答時間は45分です。問題数は、基本問題が9問、応用問題が7問です。

それでは、分析です。まずは、基本問題ですが、この問題は文章中に記載のある

50×40の答えを求める問題となります。正答率は84パーセントとなっており、全国ともほぼ同等の正答率です。

次に、応用問題です。この問題を説明しますと、1人が持っているファイルが3つあります。学級の人数は、23人です。幅120センチメートルの棚に片付けることができますか、という問題です。特にファイルを全部並べた長さの求め方を式と言葉で表さなければなりません。これが一昔前であれば、長さは何センチメートルですかという文が示され、このように式と答えを書けばよい問題なのですが、この問題は求め方を式と言葉で表現するため、自分の考えを整理しながら筋道立てて表現しなければなりません。さらには、120センチメートルの棚に入るかどうかを判断した結果も書かなければなりません。これが、全てできて一つの丸がもらえる問題です。この問題の正答率は46.8パーセントで、全国よりもマイナス8ポイント低い状況です。

あと1問ができるようにするためにも普段の授業で自分の考えを整理して、筋道立てて表現する場面を多く設定する必要があります。また、授業では、友達の考えや表現方法に多く触れる機会をつくることが大切です。算数は以上です。

山口幸作指導主事)

次に、中学校英語の分析について説明をいたします。

中学校3年生を対象に実施し、ページ数は22枚、問題数は17問で、そのうち基本問題が9問、応用問題が8問となっております。

また、その中で大問1から大問4まで、小問を合わせると、合計7問が放送による聞き取り問題となっています。

では、実際に出題された問題を御覧ください。

まず、大問1の基本問題です。(1)は、部屋の中にいる猫の様子を聴き取る問題で、(2)は神社までの道順を説明する英語を聴き取る問題です。

実際の放送を流しますので、お聴きください。

(リスニング音源再生)

説明の概要は、猫が三匹いて机の下に一匹、他の猫たちはベッドの上で眠っているという内容です。回答は2となります。

(2)は、神社までの行き方を聞いており、神社までは5分ほど真っすぐ進み、郵便局が見えたら右に曲がり、そのあとしばらく歩くと左側に神社があるという説明になっています。回答は1となります。絵を見ながら、必要な情報を正確に聴き取るといった基本的な知識技能を問う問題ですが、(1)の通過率が79.3パーセント、(2)の通過率が57.4パーセントとなっており、全国と比較して、同様の結果となっております。

続いて、大問3の応用問題です。イングリッシュキャンプに参加し、二班のリーダーとして、バーベキューパーティーの説明を聴く設定です。全ての説明を聴

いた後に、質問が行われるため、全ての情報をしっかりと把握しておく必要があります。こちらでも実際に放送を流しますので、お聴きください。

（リスニング音源再生）

明日バーベキューパーティーを行います。三つの班があり、それぞれの役割があります。班のリーダーは、班員に役割を必ず伝えてください。一班は、火おこしとご飯作りを、二班と三班は、野菜を切ります。そのあと、二班は肉を切り、三班は机を準備してください、というような内容になっています。質問は、あなたの班の仕事は何ですかという問いです。

回答は3となります。この放送問題の通過率は、24.8パーセントで、全国より15ポイントも差がある状況となっております。10以上の文章を含む長い内容にもかかわらず、1回のみの放送であること、質問に関係のない内容も含め、複数の情報が含まれていること、自分の状況を理解している必要があること、イラスト等のヒントもないこと等複数の条件が合わさった問題となっております。

これらのことから、大問1のように短い会話であれば、絵を見ながら必要な情報を正確に聴き取ることができるものの大問3のように長い会話となると、全体の概要を正確に把握し、自分の置かれた状況などから判断して、複数の情報から必要な情報だけを選んで答えるという応用力が不足している状況です。

このような問題を解く力を、あと1問とし、授業改善に生かしていきたいと考えております。

永田大作学校教育係長）

それでは、係長、指導主事が各教科の分析を細かく説明しましたが、それらの結果をもとに、どのように指導改善を行っていけばよいか、授業改善を行っていけばよいかを説明いたします。

まず、国語です。国語では、新聞を活用した授業づくりを考えました。国語で課題となった、思考・判断・表現の力を伸ばすために、多くの情報が詰まっている新聞や目的に合った資料を授業に生かしていくようにします。その有効な手立てとして、本年度から市内全学校に導入した新聞活用学習支援サイト「スクール373(みなみ)る」を効果的に活用する授業づくりを進めていきます。先進校における実践例等を紹介し、書くという単元において積極的に使っていくよう指導助言を行っていきます。

次に、算数・数学です。算数・数学における思考・判断・表現の力をつけるには、授業の中で多様な考えを出しながら、それぞれの意見を交流して解決していく場面を数多くつくることが重要だと考えました。意見の交流をする場面では、タブレットを効果的に活用していくことです。タブレット上では、画面で自分の考えを書いて、それをグループ内で共有して話し合ったり、全員の考えを一斉にモニターに映したりと意見交流を活発化するための機能が備わったアプリが導入

されています。県内でも多くの活用事例があり、研修できるようになっています。本市でも、効果的に使っている先生方も増えてきていますが、今後は全学校で活用されるよう指導助言を行っていきます。

最後に、英語です。英語では、授業の中で日常会話を多く入れる授業づくりを考えました。英語における聴く力を伸ばすために、単なる英文を聴くだけでなく英会話多く取り入れ、その中で相手の意向に沿った聴き取りを練習する場面を増やすことが重要です。その有効な手立てとして、現在中学校英語の授業に週3回入っているALTの活用を工夫することです。授業の中では、意図的な会話をつくって、その会話をALTの自然な口調で話される英語を聴く機会を増やすことが大切だと考えます。これまでもALTは授業に参加していますが、課題をもとにした活用方法の工夫について、今後も指導助言を行っていきます。

このように、課題をもとにした授業改善の具体策を明らかにしましたので、これらを進めるために画面に示した三つの施策について、より一層充実を図っていきたいと考えております。

学力向上については、今後も各学校と連携を図りながら取り組んで参ります。

それでは、次に、体力向上についてです。

竹下公博学校教育課長)

次に体力です。体力を構成する要素を具体的に説明しますと、体力は大きく行動体力と防衛体力に区分されます。行動体力の中身は、このような要素（画面を指す。）、防衛体力の中身は、このような要素となっており（画面を指す。）、行動体力を構成する一番上の筋力は高校生の時期に、持久力は中学生の時期に、平衡性や協応力等、体を調整する力は小学校の時期に著しく成長すると言われております。それぞれの体力を向上させるために、次のような分野がそれぞれの役割を担って、子供から高齢者までを対象に様々な施策を実施しております。

今回は、学校における行動体力の取組に絞って御説明いたします。

小・中学校の体力については、第1回の東京オリンピックを契機に、国民の体力への関心が向上した昭和39年から文部科学省が運動能力体力診断テストとして実施していましたが、実施種目が多岐に渡り子供にそぐわない内容もあったことから、平成11年に実施種目を見直し、新体力テストとして現在に至っております。それでは、この後担当からこの分析結果とそれに基づく対策を述べさせていただきます。

増山聡指導主事)

それでは、これまで取り組んできた体力向上の取組について説明します。

皆様が昔受けていた体育の授業を思い出してみてください。何度もできるまで練習を繰り返す。技能を中心とした授業を思い出すのではないのでしょうか。今行われている体育の授業は大分変わってきています。一言で言うと、させるから自

ら取り組む体育の授業に変わってきているということです。自ら取り組む授業とは、運動が好きになる授業であり、自らの体力的課題に気づき、それを解決する授業、そして、交流を通して自他の体力を高める授業が学校で展開されています。このような授業の繰り返し、継続が体力作りへとつながっていき、児童生徒の体力向上につながっていくものです。

次の体力向上施策は、鹿児島県教育委員会の事業である体力アップチャレンジ鹿児島についてです。この事業は、楽しみながら体力向上を図ることができる取組で、各学校の実態に応じながら体育や特別活動等の授業、業間、昼休み、放課後等の時間帯に仲間と楽しく集団で協力し合いながら運動に取り組ませ、積極的に外遊びや運動する機会を奨励する事業となっています。

小学校7種目、中学校5種目、これらの取組は学級単位で行われ、この取組を通して俊敏性や柔軟性等を伸ばしていきます。

例えば、こちらの「長縄エイトマン」は、リズムよく跳躍することを通して、持久力や競合性を伸ばすことができ、「一輪車でゴー」では、バランスをとって進むことを通して、平行性・協応性を伸ばすことができる等、各学校が計画的、継続的に進めています。

授業や体力向上に特化した取組以外にも、体力の向上を披露し、実感する場として、水泳学習発表会や運動会、持久走大会、市陸上記録会等があり、学校行事を通して体力向上を図っています。

また、交流を通して体力を高める場もあります。集会活動で体力作りの時間を設定したり、中学校は部活動に励んだりすることを通して体力向上を図っています。さらには、より高い技能や体力を競い合う本市の行事として、颯娃ナイター陸上、駅伝大会、市民体育大会等があります。これらの体育的行事を通して体力向上が図られています。このような地域の体育的行事は、子供たちが成長しても続いていく行事であり、地域行事への参加が生涯スポーツとしての取組につながっていったり、健康づくりにもつながっていったりするものとなっています。

では、このような取組を通して、本市の子供たちの体力はどうなっているのでしょうか。子供たちの体力についてデータをもとに現状を説明していきます。

こちらを御覧ください。全国体力運動能力調査は、毎年小学校5年生及び中学校2年生を対象に、4月から7月の時期にかけて8種目を実施します。

それでは、過去3年間の結果です。グラフを御覧ください。(モニター画面を示す。)これは、小学校5年生の結果です。青色、オレンジ色、灰色が本市の令和元年度から令和4年度までの結果、黄色、水色、緑色が、全国の令和元年度から令和4年度の結果です。全国と比較すると、青色の丸囲みで示している、反復横跳びは全国より良い結果となっています。

一方で、長座体前屈は全国より低い結果となっています。

こちらの画面で見ると、全国の平均を上回っている種目が多くあります。

次に、中学校2年生を見ると、小学校と同様に長座体前屈は全国平均を下回っています。こちらの場面では、20メートルシャトルランや立ち幅跳びが全国平均を上回っております。

もう少し詳しく分析を紹介します。特にすぐれている種目を紹介します。小学校では、立ち幅跳び、ソフトボール投げの2種目は、3年間、全国平均よりも大きく上回っています。つまり、跳躍力、瞬発力、巧緻性、投力がすぐれているということです。中学校では、20メートルシャトルランと、立ち幅跳びの2種目は全国平均より大きく上回っています。つまり、持久力、跳躍力、瞬発力が優れているということです。

総合的に見ますと、小・中学校とも特に跳躍力と瞬発力がすぐれていることが分かります。昨年度と一昨年度に全国大会に出場した颯娃中学校のバレーボール部の活躍は、このような本市の児童生徒の特性をよく表しているのかもしれません。

一方で、課題がある種目は、画面を見てのとおり、小・中学校ともに長座体前屈の種目が全国平均を3年間下回っています。この長座体前屈は、写真のとおり柔軟性について見る種目です。本市は、この柔軟性が大きな課題となっています。

柔軟性は、子供たちが体育授業や運動、遊びにおいても密接な関係があり、運動技能の向上につながったり、けがの防止にも大きく影響したりします。例えば、相撲の力士が稽古で股割りをしますが、これは力士の柔軟性を高め、少しでもけがの予防のために実施されていることは御承知かと思います。その上でも、本市の児童生徒が柔軟性を高めるために、私たちは手立てを講じていく必要があります。この課題を受け、私たちは柔軟性を高めることに重点を置きながら、さらなる体力向上に努めていきます。

1点目は、「伸ばしてコロコロ」に全学級が取り組む。2点目は、授業の中で柔軟性を高める運動を必ず取り入れる。3点目は、「体力ナビ」を活用し、家庭でも運動に取り組む。この三つを充実させていくために、学校教育課は、柔軟性を高めるための明確な目標の設定、柔軟性を高める実践例等の指導資料の配布、実技研修での指導等を充実させ、各学校の実態をとらえながら管理職研修会や体育主任等研修会で指導を行い、時には学校に足を運んで実態に即した指導を実施していく必要があります。

それでは、課題解決のための取組を詳しく説明します。

1点目は、柔軟性を高めるために「伸ばしてコロコロ」に全学級に取り組むことです。画面を御覧ください。これは実際に「伸ばしてコロコロ」に取り組んでいる様子です。柔軟性を高める運動として全学級で計画的、継続的に取り組ませていきます。

2点目は、授業の中で柔軟性を高める運動を必ず取り入れるということです。授業の中で、課題改善に向けた運動に継続的に取り組むようにします。特に、柔軟性を高めるためには、毎時間の体育の授業の中に柔軟性を高める運動を取り入れ、継続的に取り組ませます。学校がどんな運動に取り組ませたらよいのかということを実践例や資料を配布するようにしていきます。

3点目は、「体力ナビ」を活用し、家庭でも運動に取り組ませることです。本市の課題は、柔軟性ですが、児童生徒1人1人体力的な課題は異なることから、1人1人に合った課題解決に取り組ませます。

体力運動能力調査の結果をもとに作成する「体力ナビ」を1人1人各家庭に配布し、いつ、どんな運動をどのくらい家庭で取り組むのかを記載させ、実際に取り組むことができるようにします。

以上となりますが、このような取組を重ねていくことが本市児童生徒の柔軟性を高めるものとなり、更に体力向上につながるものと考えております。

これで、体力の現状についての説明を終わります。

永田大作学校教育係長)

最後に、学力向上を支えるほかの施策について説明いたします。

まず、読書活動の推進です。校長先生が勧める1冊を紹介する「夢ひろがる」を作成して配布しました。そして、各学校の図書室でも、紹介コーナーを設置する等読書に親しむ機会を増やし、子供たちの読解力向上の一助となっております。

次は、「R－ONE事業」です。サイエンス教室や理科作品展での優良校を表彰するR－ONEグランプリ、そして、本年から実施している科学の旅等、子供たちに理科への興味を持たせるような事業を行っています。

次は、「学びのグレードアップ3か年プロジェクト」です。それぞれの学校が持つ環境や人材、歴史、伝統等を活用し、地域と一体となって、他校にない特色ある教育活動を行っています。子供たちにとっては、学校や地域に対する誇りを育むとともに、個性を伸ばさせ、自己肯定感を高めていくことにつながります。

最後は、「夢の懸け橋講演会」です。キャリア教育の一環として、著名人の講演を聴くことで、自分の将来を見つめ、夢や希望を膨らませる機会となっております。

これらの事業を通して、子供たちのやる気や自己肯定感が育ち、学習に取り組む意欲やモチベーションにもつながり、学力向上に結びついていくと考えます。今後も南九州市の子供たちが、知・徳・体の調和がとれ、主体的に考え、行動する力が備わり、生涯にわたって意欲的に自己実現を目指す人となるように、学校教育課として学力向上・体力向上に向けて、更なる工夫改善を行ってまいります。

御清聴ありがとうございました。

塗木弘幸市長)

ただいま、担当課の方から説明がございました。小・中学校の学力向上及び体力向上施策について委員の皆様から何か御意見や御質問はございませんでしょうか。感想でもいいです。はい。末原委員。

末原貴子委員)

グラフ等を交えた、細かい説明どうもありがとうございました。

本当に自分たちのときと違って、学習、学力の問題っていうのがかなり応用力の部分で解答しにくく、本当に理解していないと普段から表現する力をつけていないと解答ができないのだなというのが全ての教科に言えることなのかなというふうに感じました。

そこで、新聞を活用したりとか具体例が出てきましたけど、もう一つ具体的な感じが見えてこないというか、この問題を解いていくために、普段どういうことを学校で日々やって指導していけばいいのかというのが、多分、それぞれの学校の学習の状況だったり先生の資質にもよりますでしょうし、いろいろあると思うんですけども、新聞も使うのであれば、それを使って子供たちに授業中にどんなことをさせていくのか。毎日なのか、国語の時間だけなのか、もっと別な時間を充てていくのかっていうのが難しいとは思いますが、そこまで具体的に学校の方に指導していく予定であればそこを教えていただきたいなと思いました。以上です。

星原貴光学務係長)

はい。お願いします。星原でございます。御質問ありがとうございます。

今御質問いただきました件につきまして、御説明させていただきます。

ちょうどこの後私、校内研修に指導に行く都合で、国語の教科書を持っておりましたので、ちょっと御覧いただきたいのですが、小学校3年生の国語の授業。毎日国語はあるんですけども、僅か1年間かけてたったこれだけの文章しか読ませない。このことが、私もずっと課題でありました。

先ほど御覧いただきましたような問題を解く45分という短い時間の中で、新聞記事のようないろんな情報が詰まったものを初めて読みながら、100字の作文を書くというのは、これは並大抵の学力では身につかないと考えております。そこで、先日行われました校長研修会の中で、まず一つ対策として打ちましたのが、こういう難しい情報を取り出して子供たちが書けるようにするためには、ということで、私なりにマニュアル本を作成しまして、校内研修で、「校長先生方、先生方に指導してみてください。」と、「こうすれば書けるようになりますよ。」という、HOWTO本みたいなものを作って御説明しました。

もう一つ校長先生方をお願いしたのは、子供たちの机の横に、いつも100字書ける作文用紙をたくさんぶら下げさせておいて、例えば先ほどの「スクール373（みなみ）る」のような記事で、「今日の新聞の一面を開いてみよう。では5分で

ちょっと読もうね。」と読ませた後に、ちぎった紙1枚に、「どんな感想を持ったかな。」とかいうのをさっと短い時間で書かせる。こういう日々の小さなことの積み重ねをさせることが、きっと、子供たちのすぐにではないですが、書く力を伸ばしていこうと思ひまして、「スクール373（みなみ）る」を全校で導入させていただいたということでございます。

「スクール373（みなみ）る」を実際に見ていただきたいのですが、よろしいでしょうか。（モニター画面にアプリを示す。）実はですね、まだ学校の中でしっかりと使われているという状況にはまだ至っていないのですが、とても便利なものでございまして、お待ちください。（画面操作）

これが実際の「スクール373（みなみ）る」の画面でございます。

全子供たちはタブレットを1人1台持っておりますので、このような画面を出すことができます。例えば、今日の南日本新聞の一面ですね。押しますと、このような形で出ます。さらに押しますと、拡大して好きな紙面を読むことができます。

高学年じゃないと一面の記事などは読めないのですが、それぞれの学年によっていろいろなものが読めるようになります。このようにですね、拡大して見ることができます。これまでも、私国語の授業の中で、新聞を活用した実践をいろいろとやってきたのですが、これまでは、新聞を活用して授業をしようとする、前もって朝から新聞を自分で読み込んで、これを勉強させたいという記事を選び、そしてそれをスクラップし、印刷して配布する、という非常に手間がかかっていたので、正直続けられなかったのですが、この「スクール373（みなみ）る」を使うことによって、毎日先生方が手間もなく、新聞を読ませるということができます。

低学年の子供たちには、「みなみさんちのクイズ」っていいものがありまして、まずは新聞を読む習慣をつける、眺めてみる、ということですね。（画面を示す。）こういうクイズが大変好評いただいているところでございます。

これが「スクール373（みなみ）る」の概要でございます。以上です。

末原貴子委員）

ありがとうございました。

本当に今、先生のおっしゃるとおりに、日々の積み重ね、少しずつの積み重ね、柔軟性もそうですけれども、一朝一夕にできるものではないと思うので、表現方法や文章力をですね、ぜひ学校で少しずつでも取り入れて、書く力をつけてほしいなと感じました。どうもありがとうございました。

塗木弘幸市長）

はい。大迫委員。

大迫雅彦委員）

はい。非常に学力、体力ともに、問題分析をしてですね、解決策がすばらしいな

というふうに見させていただきました。

今の説明を見て、「スクール373（みなみ）る」を活用したとかですね，これも具体的にまだいろいろな深い意味があることも分かって，非常に子供たちには有効だろうなと思ったところです。

一つだけ，それぞれの科目で対策が出ていて，非常にいい対策だなあと思ったのですが，数学の7ページに書かれている数学の課題解決のための学力向上のところでも少し説明がありました。グループでタブレットを使用して学習すると，学力が向上するだろうな，弱点が良くなっていくのだろうなということだったんですけど，既に使っている先生もいるということでした。既に使っている先生の子供たちの学力と使っていないところの子供たちの学力の差がどれくらいあるのか，というのがまず1点と，やはり学校訪問をしてみたときに，せっかくタブレットが1台ずつ配布されていますが，活用している先生と使っていない先生の差は非常にあるような気がして，今のこの対策を見るとほとんど全てがタブレットを使ったもので，活用の差をどうやって解決していく予定なのかということ。最後に，英語の関係で私も英語で仕事をしていましたが，どうしてもスピーチをするのはできるのですが，ヒアリングというのは常に聴いとかなないと耳が慣れないですね。ですから，先生からそのときだけ聴いたことだけで耳が慣れるかというと，やはりタブレットを使って，常にその英語を聞くとか，私たちが例えば，国際会議に行くときには1か月ぐらい英語をずっと聞いておいて耳を慣らしてから行くということをするのですが，そういうことをやらないとさっきの問題は，機械の言葉で非常に分かりにくい。

人間の言葉だったら分かりやすいと思います。単語が強調していますから。だけど，機械の言葉で非常に分かりにくいものを理解するためには，ICTを使って，この機械の英語のヒアリングに慣れるということも大事なのかなというふうに思いましたので，ぜひ参考にしていただければと思います。

塗木弘幸市長）

はい。学校教育課。

竹下公博学校教育課長）

パソコンを使った交流というのを見ていただきます。

永田大作学校教育係長）

それでは先に，よく使っている先生と使っていない先生との差というのが出ましたので，先生ごとの差は，よく分からないのですが，全国の学力・学習状況調査で，このような質問があったんです。

6年生です。「5年生までに受けた授業で，パソコンタブレットなどのICT機器をどの程度使用しましたか。」という質問がありました。この中で，6年生がほぼ毎日使っていると答えたのが30.8パーセント，週3回以上が23パーセント，週

1 回以上が37パーセントでした。

この子たちを見ると、ほぼ毎日と答えた子供たちは、算数は62.9パーセントという通過率に対して、週3回・週1回は54とか58です。やはり毎日使っている子供たちが「できてるなあ。」と、特に算数は顕著に出ました。

中学校が、なかなか使えてなくて、毎日使いましたかというのは、6パーセント、週3回以上が19.6パーセントで週1回以上になってようやく45パーセントです。なかなか課題があると思うのですが、ここで面白いのが、学校でも同じ質問をしています、学校は毎日使っていると答えていません。週1回か週2回と答えています。毎日使っている子供がいるわけです。やはり、自分で勉強している子だと思います。この子供たちが、国語も数学も英語も、全て特に国語に関しては72.9ポイントと非常に高い数字になっております。

ですから、自分から学べる子供たちが、どんどん使って勉強しているのだろうということは分かりますので、やはりこれをどのように学校が使わせているかということ、私たちが学校ごとに大体使っている学校と使っていない学校が分かってきましたので、使っていない学校については、管理職と相談をしながら、どうやったら使えるのか、先生たちに研修が足りないのか、面倒くさいからやらないのか、その辺りも分析しながら今後指導していきたいと考えております。ちなみに、先ほど、よく算数で使っている「交流」と言いましたが、これが先ほど説明しました1人1台タブレットに入っている「ロイロノート」というアプリです。(画面を示す。) ノートのようなものです。よく使っている子供たちは、ここにもどんどんこうやってノートを書き込んでいきます。そして、これに例えば写真を撮ってこういう写真をノートに貼り付けるとかできます。自分の考えを友達に送ったり先生に送ったりすると、画面に全部出てきて、みんなで考えを一緒に共有できます。

それから、資料箱を開くと、先生が問題を作ってここに入れておけば、「問題があるので、できるときにやりましょう。」と子供に投げかけることができます。子供たちは、先生の提出箱に送って「頑張ってるね。」といったようなことができます。私が授業していた頃にこれがあれば、本当に楽しんで使っただろうという機能がたくさんありますので、ぜひこの魅力を先生方にも伝えて指導していきたいと思います。以上です。

大迫雅彦委員)

初めて「ロイロノート」というのを見せていただいたのですが、先日学校訪問に行ったときに、算数というのは繰り返しした方が子供は伸びるのに、遅れている子を待っている。「無駄な時間だなあ。」と思ったことがあるのですが、今みたいなアプリがあると、実際に活用している子供とそうでない子供は差が出るだろうと感じました。ぜひ活用をお願いしたいと思います。

塗木弘幸市長)

はい。教育長，どうぞ。

有馬勉教育長)

今話題になっておりますタブレットのことですけれども，学校に配って，時間もたっております。実際の使用の在り方を見ておりますと，小学校に比べて中学校がはるかに遅れている。それから，進んでいる学校があれば，遅れている学校，一つの学校で言いますと，よく使っている若い教員もあれば，なかなかタブレットを使いこなせないちょっと年代が高い方々もおられます。そういうことから，先般の校長研修会・教頭研修会では，学校内の格差を無くそう，学校内の教員は，同じレベルでどんどん使っていくようにしよう，学校内の教員格差を無くし，それから，学校間格差を無くし，小学校と中学校の格差を無くしていこうということを今後，教育委員会としては進めていきたいと思えます。

今の子供たちは，やがて社会から確実に今以上にパソコンを使い，機器を使っていく世界を生きていかなければいけないので，使わない先生方の時代ではありません。本当に深刻に受け止めてやっていかないと，差はどんどん広がっていくし，なかなか本市の学力の向上というのも難しいと感じております。これが第1点です。

それから2点目は，学校内で今のような格差を縮めていくためには，さらに進んでいくためには，管理職のリーダーシップは，本当に重要な問題であると思っております。管理職の方々も結構年代が高いです。そういう方々が，頭を切り替えて若い子供たちが将来に生きるためには，今やらなければいつやるかというぐらいの必死さを持って当たっていく必要があると思っておりますので，これから更に力を込めて進めていきたいと思っております。

塗木弘幸市長)

はい，どうぞ池畠委員。

池畠薫委員)

私が一つ気になったのは，全国学力・学習状況調査6年生の算数の中で，ただの掛け算ですよね。50脚の40列。これが達成出来ていない16パーセントの児童がいる。実際，掛け算というのは小学校2年生の段階だと思いますが，全国平均並みということで，納得していいものだろうか。やはり，その学年で習得すべきことがしっかり定着して，次に上がっていかなければ，この16パーセントの児童は中学校，高校，社会にやはり出ていくわけで，もちろん繰り返して，先生方も対応しておられると思いますが，本当に積極的にやっていただくべきことかと思えます。あとは定着ですね，繰り返ししないといけないと感じました。

先ほど教育長が，学校側の管理職のリーダーシップということをおっしゃいましたけれども，今年効果的な指導方法の研究を行う協力校が2校ですと，南九州

市の学校規模から考えて、2校というのは、どうなのかなと。本当に学校の現場の先生方って本当に忙しいと思います。ですが、やはり先生方が一生懸命協力校を受け、実際に関わり合っていくことで、必ず児童や生徒は伸びているということを学校訪問で見させていただいておりますので、本当に大変な中ですがけれども、協力校をなるべく児童生徒のために受けていただいて、先生方が研修を積み重ねていただいて、それを子供たちに還元していただけたらありがたいと思います。以上です。

塗木弘幸市長)

はい。学校教育課。

増山聡指導主事)

算数についてです。ありがとうございました。「 50×40 」という問題が84パーセント、6年生が4月に解いて「2000」という答えが出せないということがございます。誤答傾向としても「200」という回答が一番多かったです。

これは、池畠委員がおっしゃるとおり、普段の繰り返しの練習、昔であれば、知識理解、特に計算力と言われておりました。その繰り返しという部分が、今御説明もあったとおり授業の流れが、意見を交流したり、自分の考えを表現したりというところに移ってきている。算数・数学というのは、やはり低学年からの積み重ねがないと高学年、中学校となったときに、思考・判断するときの基礎的な力として十分に持っていないと子供がぼうっとしてしまうという状況を生みかねませんので、そういった意味でも、先ほど「ロイロノート」の説明もございました。このタブレットには、「ジャストスマイル」というドリルのアプリも入っており、繰り返し計算ができるアプリも入っております。アプリをうまく活用しながら、基礎的な部分はしっかりと身につけていくために、計算ドリルも使います。授業の中で、大迫委員の御指摘のあった通り、できる子たちが空いた時間に何をするのかということも、このタブレットを活用することが新たな手法として出てきましたので、上手に先生方も活用しながら、基礎的な部分もしっかり身につけることができるように今後とも指導をしていこうと考えております。以上です。

塗木弘幸市長)

ありがとうございました。はい、海江田委員。

海江田宗順委員)

はい、ありがとうございました。

今、こうして見させていただいた中で、国語科、4ページから始まりました。

その中で、グラフを読み取って条件に合わせて答えを導きなさいという問題が4ページに書いております。まさにこれは、国語というよりもグラフを読み取って条件に合わせる算数ですよ。次のページにいきますと、算数が出てきますが、5ページの文章読解力、これがなければ応用問題なんて解けませんよ、というま

さに算数ではなくて国語ですよ。その中で、国語科あるいは算数科、数学科の先生方は、どれほど交流を持って、共に子供たちの学力向上を考えていってあげられているのか、という先生方の国語、算数、その触れ合いというのがどこまであるのかなということが気になりました。

それから、体育に移りますが、いわゆる能力に合わせてという昔から体力には二つあります、といういわゆるスキヤモンの発育曲線ですよ。その中で、子供たちの体格、体のづくりが成長していく中で、プレゴールデンエイジ、ポストゴールデンエイジという小学校上級生から中学生にかけて、その子に合わせた引き出し方をしてあげられているのかということが、これにかかっているのかなと思うのですが、昨今、朝礼、運動会等も暑いのですが、子供たちが貧血気味で倒れるということが多すぎるなと思います。そのようなことをどのように考えているのか教えていただきたいと思います。

それと、英語も出てきました。大迫委員が言ったとおり、人間の言葉と機械の言うことが違うというお話をいただいたのですが、私もこれを聴いていて、4択のところで、わかりませんでした。4択ですので、これかなと思ったのは当たって、25パーセントですよ。案の定、正解率が24.8パーセントという数字を見て、ほぼ当てずっぽうなのではないかという思いしか沸かなかったのですが、やっぱり大きな影響あるのでしょうか。そうであれば、タブレットの活用を是非お願いしたいと思いますし、使える英語ということで、小学校4年生ぐらいから英語科が出てきているわけですが、使える英語を堂々と使える子供たちをつくってほしいという願いを込めさせていただきたいと感じました。以上です。

塗木弘幸市長)

質問でしたが、どうでしょうか。

永田大作学校教育係長)

ありがとうございます。本当に海江田委員がおっしゃったように、それぞれの教科の力がいろいろな違う教科で発揮されなければいけないと。今の学習指導要領が、こういう知識理解を付けましょうというよりは、「国語で付けなければいけない力はこんな力です。」「算数・数学でこんな力です。」という、資質能力を前面に押し出しています。ですから、それをただ身につけただけでなく、それをいろいろな教科で使える能力にまでしていかないといけないところを今、おっしゃったのだと思います。

まさに、確かにテストでそれが試されていますが、実生活でも生かされるような指導を考えながらやっていきたいと思います。当然、体力なくしては学力も身につかないと思っておりますので、全部をバランスよく身につけるというところは常に我々は意識していきたいと考えております。

それから、英語の話が出ましたが、デジタル教科書といって、教科書がもしか

したら将来も紙ではないという時代にもなってきています。英語の場合は、デジタル教科書が入ってタブレットで教科書を見ることができるということも出されておりますので、音声をしっかり聞くということは、今後できるようになってくると思っております。そういうものの活用も、我々も勉強しながら、学校と一緒にやっていきたいと思います。以上です。

塗木弘幸市長)

はい、各委員から意見をいただきました。ありがとうございました。

私から一つ、学力水準は、どうして日本は遅れたのか。また、ICTに関してもなぜ遅れたのか、ということが気になりました。

竹下公博学校教育課長)

OECDのPISA調査といいますが、始まった頃は日本はトップだったのですが、アジア諸国、香港、シンガポール、日本に見習って日本を追い越すということで、一気に抜かれまして、それでまたヨーロッパのスウェーデンとかは、常に高い学力を持っている。日本は、文化の発展とともにゲームも発展し、メディアも発展し、子供たちの興味関心がそちらに、一方で中国等の東南アジアは熱心に勉強に取り組ませている。生活の中でというところで、文部科学省もいいところを学びながら、ゆとりの中で、子供たちをいかにバランスよく伸ばしていくかというところで、かなり学力も回復してきております。

また、上位に追いつきつつあると、やっぱりこういう調査をして、きちっと分析して、自分たちの指導の至らないところを改善していくというサイクルは大事というところを、それが証明しているかなと思っています。

塗木弘幸市長)

はい、海江田委員どうぞ。

海江田宗順委員)

質問をさせていただきたいのですが、その調査ですけれども、日本は大方というかもうほぼもう100パーセントに近いような数字で受診しているのですが、例えば、諸外国の受診者というか、被検査に当たっているものは、全員でしょうか。それとも、例えばトップに10人いた場合にトップの3人が受けるのと、10人受けるのとでは、全然違うと思いますが、現実はどうなのでしょう。

竹下公博学校教育課長)

先ほど申し上げた調査は、抽出です。抽出ですから、日本でもどこかの学校はどこの県のどの子供たちが受けたのかということは分からないですね、委員の疑問もよく分かります。中国はどの子供たちが受けたのだらうなということですね。でも、結果は結果ですから、真摯に受け止めるというところですよ。

塗木弘幸市長)

はい、教育長

有馬勉教育長)

少し付け加えますと、戦後の日本の教育は、世界に植付けを起こそうということで、知識注入型の教育を一生懸命やってきました。ですので、主体的に自分から勉強するというのではなくて、どんどん知識を注入することに明け暮れて、それが1番良いとされていました。高校だと、大学入試に通るために大学入試そのものもそういう世界でしたから、関連しながら知識をどんどん身に付けさせ、そういう時代が非常に長かった。そういう授業を受けた人たちが、教員になって、そのイメージで、さらに同じようなことを繰り返していくので、それが再生産され、長かったのですよね。

PISAの分析等をしてみると、思考力とかいう辺りが非常に劣っているということが分かってきて、学習指導要領、それから、指導方法ということも大きく改善しようと力を入れてきたのですが、なかなか年配の方々が、そういう切替えが出来ないということで、現状があると思っています。ですので、先ほど申し上げましたように、まさに今の子供たちというのは、はるかに我々の想像以上にコンピューターを使い、パソコンを使い、どんどんやっていく、その世界で生きていくわけですから、年齢の高い先生方もタブレットが不得手の先生方も、そこは切替えてもらって、同じレベルで教育に当たってほしいと思っています。

塗木弘幸市長)

はい、ありがとうございます。勉強になりました。

それでは、協議事項の2番目「その他について」、皆様方から何かございますか。なければ私の方から1点、いじめや不登校の問題です。今年度2学期も早いもので1月過ぎようとしています、特に教育委員会で議論していることや学校現場で取り組んでいることはありますか。

竹下公博学校教育課長)

まず、不登校からでございますが、令和元年度から令和4年度までの不登校児童生徒の数を申し上げますと、39、43、44、49と増加しております。

これを受けまして、本年度、教育委員会といたしましては、この不登校になりそうな子供の早期発見、そしてその子たちへ早期対応を行うために、理由もなく欠席した子の日にちが7日となった時点で各学校に、個別の支援計画を作成させ、各学校はその計画に従って組織的な対応を進めてもらっております。

さらに、対応の成果を毎週、個別支援記録に記入させ、教育委員会に提出させております。そうすることによって、7日以上欠席の子供を学校に意識させるとともに、教育委員会は子供に対する支援策について、学校に具体的なアドバイスができるということに取り組んでおります。

その取組を始めまして本年度、現時点、8月末時点で、不登校の児童生徒は15名、昨年度の同時期は22名でした。果たして今後これが効果を表すかどうかとい

うことを今後見守っていきます。

一方、いじめのほうですが、令和元年度から順に、186件、157件、167件、126件と、おおむね100件を超えている状況ということです。いじめに関しましては1件でも多く発見し、1件でも多く早く解決するという認識のもとに、このような取組を行っておりますが、まず、基本的に学校に指導していることとしましては、いじめを発見した場合はもとより、疑わしい場合についても、校長自ら事件を把握して、「一晩置くな。」その日のうちに保護者にまで、きちんと説明をして、御理解いただいて、小さいうちに解決していくということを今徹底しております。

さらに、もっと発見できないかということで、1人1台タブレットを使ったアンケートを作成して、子供たちが先生に言えなくても、アンケートで答えることができるような取組も、行っているところであります。以上です。

塗木弘幸市長)

はい、ありがとうございます。減っているということです。このことについて皆さんから何かないでしょうか。何もないようですので、以上で今日の協議を終了いたします。本日はありがとうございます。

東成功総務課長)

ありがとうございます。それでは、続きまして会次第その他でございます。何か委員のみなさまから何かなかったでしょうか。よろしかったでしょうか。それでは、事務局から次の日程等について御説明させていただきます。

有菌塚也行政係長)

はい、この総合教育会議につきましては、毎年2回開催させていただいております。今回は、令和6年の2月頃を予定としております。詳細につきましては、またお知らせをさせていただきたいと思っておりますので、その際はよろしくお願いしたいと思います。

東成功総務課長)

はい、それでは以上でございます。それでは、会次第の5番目閉会でございます。以上を持ちまして、令和5年度第1回南九州市総合教育会議を終了いたします。みなさま、ありがとうございます。

議事録署名人 塗木 弘 幸

議事録署名人 大迫 雅 彦